

## 独り立ちて、善き強き桶を作る

― 内村鑑三の詩歌

内村先生が詠まれた詩と歌は数限りない。その中から、必ずしもよく知られているとは思えない、私の心に深く刻まれている詩三編と歌一首とを紹介したい。

第一は英語による詩“*Our Baby*”である。道家城一郎訳(一)で読む。

### わが家の赤ちゃん

かわいい小さな女の子、  
うれしいわが家の新入り。  
静かな、無口の、泣かない赤ちゃん、  
めったに笑わないが、笑うときの  
ああ、何というすばらしさ！

わたしは彼女に、遺伝とメンデルの法則を読む。  
あごと額とは、父のもの、  
目とおとは、母のもの、  
その気質は、一代とんで、わたし自身のもの、

誇りたかく、だまされると怒る。

玩具をこのまず、  
日常のものをこのむ。  
花や木やランプやほうき、  
とくに人の顔をよるこび、  
注意ぶかくじつと見つめる。

彼女はわが家の赤ちゃん、だがわが家のものではない、  
彼女は、みずから、一個の人格。

無限の根源から来り、  
測り知れぬ探さを、その目にやどす、  
これぞ永遠の価値を示す確かなしるし。

われわれは彼女を愛撫する、しかし、客として尊ぶ、  
わが家に留まる天使の旅人として、  
わが家の保護に委ねられた子供として。  
聖なる御子が、ガリラヤの家で  
ヨセフとマリアに委ねられたように。

一九二六年、内村六六歳の作。その前年九月、長男祐之の家庭に初孫正子が誕生した。「その気質は、一代とんで、わたし自身のもの」と言う好々爺ぶりはほほえましいが、

「彼女は、みずから、一個の人格。われわれは彼女を客として尊ぶ」に至っては、私どもは肅然たらざるを得ない。

第二は、次のような前書きの付された「桶職」(二)と題する、内村壮年期の一編である。

### 桶 職

去る二月某日、余は一日の閑を得たれば、杖を三浦半島に曳(ひ)けり。時に相模湾を隔てて富士の美貌を望むあたりに、一人の桶職(おけしよく)の、家においてその業に励むを見たり。都会人士の、益なき野心にかられて騒然たるに対し、彼の静肅なる勤勉の喜ぶべくありたれば、彼の心を歌わんとて、歩を運びながら左の一編を口ずさびぬ。

一 われはただ桶を作る事を知る

そのほかの事を知らない

政治を知らない、宗教を知らない

ただ善き桶を作る事を知る

二 われはわが桶を売らんとて外に行かない

人はわが桶を買わんとて、わがもとに来たる

われは人の、

われについて知らんことを求めない

われはただ家において、強き善き桶を作る

三 月は満ちて、また虧(か)ける

年は去りて、また来たる

世は変わり行くも、われは変わらない

われは家において、善き桶を作る

四 われは政治のゆえをもつて人と争わない

わが宗教を人に強(し)いんとしない

われはただ善き強き桶を作りて

独(ひと)り立ちて、

はなはだ安泰(やすらか)である

「一人の桶職の心を歌わん」としたこの素朴な詩には、

内村鑑三の「キリスト教のgenius(向き)」(三)が端的に表明されていると言えよう。

第三に、これは彼自身の詩ではないが、内村が自ら「精神訳」と称する訳詞の一例として、『愛吟』所載の「偉大なる人」(四)と題する一編を挙げたい。

## 偉大なる人

アデレイド・プロクター夫人

愛のために至誠（まこと）の心をもて

惜しまず与うる人は大なり

されど、愛のために臆せず物を受くる人は

さらに大なる人と称（たた）えん

われは自由に大過をゆるす

気高（けだか）き人の前に平伏（ひれふ）す

されど、ゆるされて、よくその責に堪うる人は

さらに気高き人と称えん

注 天の与うるを取らざる者はかえつてそのとがめを受く。

『愛吟』<sup>(五)</sup> は、内村が若き日から愛誦する「欧米詩人の短編二、三十を世に紹介すべく」一八七九年、彼三六歳の時に刊行された小冊である。「されど、愛のために臆せず物を受くる人、されど、ゆるされて、よくその責に堪うる人」こそ、「GREAT」（表題）と歌うこの短編は、世俗に在って信仰に生きんと苦闘する私どもにとって、尽きざる福音的慰めの泉である。

もうかなり前のことになるが、「日韓青年友和の会」のプログラムで一群の韓国青年男女が来日した折、その同行者の一人に年配のご婦人がおられた。その方が私どもにお手製のしおりを下さったのだが、それには和歌の一節が墨書されていた。例えば内村先生の歌だという。思い当たるころろがあり早速調べて見ると、その歌は内村の書いた手紙の中にあつた<sup>(六)</sup>。

病める若い友を慰むる辞

欲（おも）うこと成らぬは成るに増すめぐみ

砕けて悟る十字架の道

思いがけないことに、この短い手紙の宛先は中島静江と言い、私の恩師山本泰次郎（一九〇〇〜一九七）夫人活子（一九五〇年没）の姉であつた。この姉妹は相携えて熱心に「内村聖書研究会」に出席する女学生であつた。内村は彼女らを愛し、それぞれの結婚式の司式を勤めた<sup>(七)</sup>。姉の場合にはその結婚式についての感想を英語で綴り、自分の英文雑誌に寄せてもいる<sup>(八)</sup>。付け加えれば、静江の結婚相手は末永敏事と言い、「内村聖書研究会」の古い会員であり、医師として傑出した人物であつたが、昭和大战中その抱いた反戦思想のゆえに特高に逮捕され、敗戦のころに獄死した、と伝えられる。

注 (一) 『内村鑑三英文論説翻訳編』下 (岩波書店、

一九八五) 311頁

(二) 『内村鑑三信仰著作全集』22 (教文館、

一九六三) 356頁

(三) 『続一日一生』(教文館、一九六四) 188頁

(四) (二) 5 (一九六二) 173頁

(五) 同右 137頁

(六) 『内村鑑三日記書簡全集』8 (教文館、

一九六五) 75頁

(七) 同右 3 (一九六五) 310頁

同右 4 (一九六五) 150頁

(八) (一) 333頁

(九) 森永玲 『反戦主義者なること通告申し上げます―

反軍を唱えて消えた結核医・末永敏事』(花伝社

二〇一七)

(所載) 『みぎわ』第56号

二〇一六年 浜松聖書集会